

常なる磐

つねなる いわ season II

令和3年12月10日(金)

その1

◇ 湯浅先生(学校保健委員会講師)からの すてきな話②



学校保健委員会の講師は、湯浅景元(ゆあさ かげもと)先生。中京大の名誉教授であり、医学博士。大学在職中はスケート部長として浅田真央さんらの教育に携わられた。同じく教え子である室伏広治スポーツ庁長官とも親交が深く、連名執筆の論文もある。メディアにも引っ張りだこで、出演は数知れない「すごい先生」。

講演前の休憩時に先生とのお話の中で頂いた素敵な話についてのよもやま話②。

その③「室伏広治さんの話」

「マスターズの松山選手のキャディーのホールアウト前のお辞儀。海外の方はあいうフェアプレーが大好きなんですね。」と、室伏広治さんの話へ。

「キャディーで思い出したんだけど、【スポーツ】ってゆうのは、もともと「気晴らし」なんです。「気分転換」ですね。でも、一万円札の方が「競技」って訳しちやっただから日本人は戦うイメージがある。でも、欧米人は違うんですね。「気晴らし」とか「余暇」の感覚があるんです。」

「日本と欧米では、そうしたスポーツの捉え方というか文化の違いがある。はじめてヨーロッパのスポーツ協会に呼ばれて欧州に行ったとき、最初に連れて行かれた場所が「チェス」、そのあとは「カードゲーム」ですよ。びっくりしちやっただけど、あちらの方は「これもスポーツです」ということを伝えたかったんじゃないかな。やはり、スポーツは「気晴らし」や「余暇」なんです。」

「だからね、英国のゴルフ場では、ゴルフ場の芝を整える人がボードの一番上に名前がある。日本なら会長でしょ。でも英国は違うんです。芝を管理する人がいなきゃ、誰もゴルフはできないという考え方。会長なんて、ずっと下ですよ。」

「そうしたスポーツに対する考え方や文化があるから、彼らは【スポーツマンシップ】が一番大事で、大好きなんですよ。それを象徴するのが「スポーツマンシップ賞」。世界的見地でみて贈られる賞です。」

「この賞は、毎年誰かを表彰するという賞じゃあないんです。何年も続けて贈られる時もあるし、数年間空く時もある。該当者なしという考え方ですね。」

「この「スポーツマンシップ賞」をもらった日本人がいるんです。すごいでしょ。しかも二人も。初めて受賞したのが室伏広治さん。あのハンマー投げの。室伏さんは、その賞の重みをよく分かっているから、受賞の時は相当喜んでいましたよ。『オリンピックの金メダルをもらった時より嬉しい。』って。」

「その時の結果だけじゃあないんです。認められたスポーツマンシップは、ずっとやってきた姿勢を認められたっていうことでしょ。その価値は大きいですよね。」

「二人目というか、二度目の日本人の受賞は、サッカーの「なでしこジャパン」。試合中に反則行為をしないで戦う姿勢を認められたんですね。1試合や2試合、その大会じゃなく、ずっとやってきたことが認められたんです。」

…と、ここで『そろそろお願いします。』と養護教諭から声が掛かる。

もっともっと先生のお話が聴きたかった。よし、来年もお呼びしよう。

紙面が余ったので、湯浅先生のブログから。

<見つめていてほしい>

フィギュアスケートの練習に来る子どもたちには、たいてい母親が付き添ってきます。自宅と練習場の送り迎えのためです。練習場まで子どもを送ってきた母親たちは、送った後に帰ることはありません。子どもの練習が終わるまで、練習場で待っています。

こういった風景を見た当初は、親も大変だな、と感じるだけでした。ところが、子どもの練習が終わるまでじっと待っている母親の多くが、練習する我が子をじっと見つめていることに気づいてから考えが変わりました。子どもは母親から見つめられていることが大事なんだ、と。

ある日私はAMラジオを聞いていた。こんな唄が流れていた。「ああ、戸口に立っているお母さんにすごく会いたい」 そうよ！と私は言った。私にはその唄が理解できる。私もよくそう思ったものだ。戸口に立っているお母さんに会いたいと。実際にしばしば、私の母はいろんな種類の戸口に立って私のことを見ていた。

子どもだけではない、大人だって、愛する人、信頼できる人、頼りになる人から見つめられていたい。見つめられる人がいる人は幸せなんだ、ということでしょう。そこには口から発せられる言葉は必要ありません。じっと見つめてくれている人が存在しているだけでいいのです。

その存在は実在でなくてもよいはずです。その人の心の中にある見つめてくれる人の存在だってよいのです。